

## 終わりになき褥瘡との闘い

大阪頸髄損傷者連絡会 赤尾広明

### ■骨折と褥瘡の厄介な関係

5月22日に東京で行われた頸損連とリハ工の合同シンポジウムにパネリストとして登壇させていただきました。いや、正しくは会場と大阪の僕の自宅ベッド上を Skype でつないでお話させていただいたのですが、実は3月に左足の大腿骨を骨折した僕はこの原稿を執筆中の現在(6月末)も自宅療養中の身でして、東京に行くことができなかったので、一度は参加を断念しましたが、便利な時代になったものです。Skypeで報告もパネルディスカッションもできるのですから、改めて驚きました。しかし、もっと驚いたことがつい先日ありまして、今回の骨折は重篤な後遺症として、このまま“偽関節”になることが濃厚という診断を宣告されたのです。本来であれば手術して治すところなのですが、僕は以前、左足首を骨折した際にシーネと呼ばれる添え木のようなもので骨折部位を固定していたところ、かかとかからくるぶし、ふくらはぎに至るまで褥瘡だらけになったことがありましたので、今回も手術となれば否応なくギプスまたはシーネで固定しなければならず、褥瘡リスクが高いのは明らかでした。そのため、治療するにも打つ手がなく、安静にしながら自然治癒を待つという消極的選択しかなかったのですが、その結果、血行不良等が生じて骨がくっつかないまま偽関節になりそうなのですね。つまり、治らないというより、痛みの感覚がない頸損では褥瘡リスクもあって治す術がないということ。この2つを天秤にかけたら、手術をすればギプスを外す段階ではすでに内部で褥瘡ができていのはほぼ確実で、その場合、最悪足を切断とか、細菌感染による敗血症で死んでしまうこともあり得るだけに、悩む余地はありません。骨の形成をサポートする食生活に切り替えながら骨がくっつくことを信じて待ちましたが、今回、褥瘡の報告を行うにあたって、まさか間接的に現在進行形で褥瘡リスクのお話をする事なるなんて思いもしませんでした。

かなり前置きが長くなってしまいましたが、当日

はまず初めに頸損当事者からの報告として「褥瘡は何を奪ったか？」というテーマを与えられていたので、褥瘡によって僕自身が「奪われたモノ」について振り返って考えてみましたが、僕は頸損になってからもうすぐ30年。まだ障害受容もできていない受傷4年後に右の坐骨部に褥瘡ができてしまいました。それから積み重ねてきた頸損歴の約半分を褥瘡で苦しめられることになるなんて当時は夢にも思いませんでした。悔やんでも悔やみ切れない悪夢のはじまりは無知が招いた取り返しのつかない単純な処置の過ちでした。

### ■無知と過信の代償

僕はもともと皮膚が弱く、かぶれたりとか汗疹で痒くなるが多かったのですが、そんな時はいつもリンデロンVG軟膏を塗布していました。実際それで症状が治まっていたので、僕は皮膚トラブルに効く万能薬くらいに思っていたのですが、勝手なその思い込みがそもそもの過ち。最初にほんの少し坐骨部の表皮がめくれてきた時、僕は何の疑いもなくリンデロンを塗布していたのですが、処置としては褥瘡にリンデロンは逆効果で、みるみるうちに悪化、手に負えなくなってしまったのです。お尻って自分には見えないだけに慎重にならなければいけないのに、何の根拠もなくすぐ治るだろうと過信していましたが、さすがに不安になって病院で診てもらったら、「すぐ入院して手術が必要」と宣告されました。そのくらい酷い状態になっていたのですよね。無知なのに過信…今思えば最悪の対応でした。

### ■入退院と手術の繰り返し

入院してすぐに“筋皮弁術”という大手術を行い、3ヶ月ほどで完治して無事に退院することができたのですが、その4ヶ月後に予期せぬ事態が発生しました。手術跡の縫い目から大量の膿汁が止めどなく出てきたのです。どうやら病院内で感染したMRSAを閉じ込める形で蓋をしてしまったので、内部で増

殖した膿が皮膚を突き破って外に出てきたのですね。翌朝病院に行ったらその日のうちに手術室に運ばれて緊急入院。何度も切開しながら、2度目の大手術を行って8ヶ月後に退院。「今度は大丈夫だろう」と思いながら半年経過しても無事なんともなかったもので安心していたら、約2年後にまたほとんど同じ場所が裂けてきて、よく見ると奥深くまでアリの巣状に穴が開いていたのです。またもや入院して手術、今度は半年かかりました。この4年間で10回以上の手術および長期の入院は僕からまず「安心」という2文字を奪いました。映画を見ている、友人と話している、何をしていても心のどこかでつねに褥瘡の不安がつきまとうようになったのです。

### ■悪夢は何度でもやってくる

退院後、2年経過しても坐骨は何ともなかったもので、今度こそ「もうないだろう」と思いながらも不安を抱えたまま過ごしていましたが、悪夢は別のところからやってきました。初めてショートステイを1週間ほど利用することになったのですが、入所してわずか3日目に仙骨部分に褥瘡ができたのです。それまでの14年間で一度もなかったことない場所に発生した褥瘡は完治するまで約8ヶ月を要しましたが、入院するのはもうコリゴリだったので、在宅で皮膚科の先生に往診してもらいながら治療しました。ようやく治ったと思ったら、またまたまた坐骨の縫い目が裂けて出血。指1本入るくらい斜めに奥深くまで広く大きなポケットが広がっていました。再び往診で壊死組織を切り落としながら肉芽が再生されるのを待ちましたが、3年ほど続けた頃に先生から在宅での処置の限界を告げられ、これまでの整形外科ではなく形成外科に入院を勧められました。そして、4度目となる筋皮弁術を行い、以前と違ってすごくキレイに治ったのですが、主治医からは「今後は2時間以上車椅子に座ってはいけない」という思わぬ言葉か…。それほど再発リスクが高く、次となればもう手術することも難しいので、事実上の寝たきり宣告。さすがに絶望的な気分になりました。

### ■シーティングで激変した人生

そんな時に出会ったのが“シーティング”でした。僕の場合、褥瘡の再発を繰り返していた右の坐骨だけが極端に圧迫されていたのですが、車椅子の構造、車椅子クッションの除圧力、そして姿勢を見直すことで大幅に改善され、以降もう10年以上経ちますが、お尻は未だになんともありません。シーティングの効果は絶大でした。

その一方で、今はまた新たな場所に褥瘡ができてしまい、今も現在進行形で頭を悩まされています。最初は左足の裏側、小指の下あたりで、僕の車椅子のフットレストが硬いから、足の角度が少しでも違えば、ある一点が強く圧迫されてしまうのです。次は左肘で、座位バランスを保持したいので肩ベルトを強く締めすぎた結果、肘が肘掛けで強く圧迫されていたのが原因でした。いずれも脂肪の少ないところばかりなのでなかなか治らず、しっかりとケアしていても再発しやすいのが致命的でした。加えて、冒頭に書いたように左足首を骨折したことで左足は膝から下がほとんど褥瘡という状態になり、ここ数年はずっとそんな感じが続いています。

### ■褥瘡が奪ったかけがえのないもの

最初の処置を誤ったことによる無知の代償はあまりにも大きく、坐骨部の褥瘡だけでトータル14年の日々を不安の中で過ごしましたが、治ったからといって不安が消えるわけではなく、今なお再発リスクと向き合っています。僕は何をするにしても全力で楽しみたいと思っているのですが、褥瘡ができてからは心底楽しむことができなくなりました。絶対的な安心感を奪われたうえ、治療のためにベッド上での生活を余儀なくされ、大切な時間まで奪われました。自分の無知や油断、怠慢が招いたとはいえ、メンタルまでやられてしまう褥瘡はまさに見えない怪物のようなもので、いつ何時襲われるか分かりません。「予防に勝る治療なし」と言いますが、他人事とは思わず、身を守るためにも日常的に予防ケアをして、異常を感じたら迅速な対応ができるように普段から心がけておきたいところです。